

浦賀文化

第三海堡

だいさんかいほう

明治時代に三基建設された東京を守る海上要塞の一つである第三海堡は、当時の世界最先端の技術を結集し、三十年に及ぶ難工事の末に竣工した。

冬の澄んだ空気の中で、東京湾に目をやると、背後に横たわる房総半島の手前、猿島の右手沖合に二基の人工島が見えます。これは海堡と呼ばれる人工の島です。もともと三基あった海堡のうち横須賀市側にある第三海堡は、関東大震災により破滅的な被害を受けほとんどの構造物が海中に没し暗礁化し、東京湾の海の銀座という異名をもつ浦賀水道を往来する船舶に危険が生じることから、平成十九年、陸上に引き上げられました。海堡とは、砲台を設置するために海上に設置された人工の島をいいます。東京湾に明治から大正期に造られた海堡は、首都防衛の生命線として重要な役割を担うものでした。

京湾の入口に位置する浦賀に奉行所が設けられたのも、その一環と考えられます。また、幕末のころに、西洋諸国が植民地政策のもとに東アジアに進出してきたという国際情勢も大きな要因になりました。今では観光スポットとして人気のある品川の「お台場」も、ペリーが浦賀に來航したことを契機に設けられた砲台のひとつでした。さて、東京湾に設置された三基の海堡について話を戻しましょう。

陸軍卿・山県有朋の目に留まった西田は、明治四年（一八七一）、四十五歳の時に上京して兵部省に入り、兵營、士官学校、幼年学校などの建築に従事しました。明治七、八年ころ、首都防衛のための議論が活発になる中で、西田自身も東京湾に要塞を建設する必要を上申ししていたと言います。

第一海堡は明治十四年から、第二海堡は明治二十二年から、第三海堡は明治二十五年から着工され、第一、第二海堡は明治中期から大正初期にかけて竣工しました。しかし、第三海堡は水深四十メートルと深いうえに潮流も早く、その築造における危惧の念から反対意見が続出したといえます。その中で西田は自分自身も潜水服を身に付けて海に潜るなど、生涯を海堡建設に捧げました。しかし、西田は第三海堡が大正十年に竣工するのを待たずに明治二十九年五月、七十九歳で他界しました。

★参考文献
・「続・横須賀人物往来」
財団法人横須賀市生涯学習財団
・「江戸東京湾事典」江戸東京湾研究会編
新人物往来社
・NPO法人アクションおっぱまホームページ



東京湾と海堡

ます。しかし、その建設技術は今日の海洋・港湾建設技術の礎（いしずえ）となり、多大な経験と教訓を与えてくれました。

三つの海堡が見える場所である衣笠山公園頂上に海堡建設事業に尽した西田明則を称え「西田明則君之碑」が設置され、大正十二年（一九二三）四月に除幕式が行われました。

平成十二年から十九年にかけて陸上に引き揚げられた第三海堡の構造物は、国土交通省から横須賀市に移管され、現在、市の重要文化財指定を受け、うみかぜ公園と夏島都市緑地内に、文化遺産として展示・保管されています。



歴史 語りい座・浦賀 三十六

郷土史家 山本 詔一



●サラセン号来航●

文政五年（一八二二）四月二十九日、イギリスの捕鯨船・サラセン号が来航した。

第一報は浦賀港に入港した廻船が房総半島の洲崎沖を航行している異国船ありというものであった。浦賀奉行所は直ちに小田原藩と浦郷の陣屋を構えていた川越藩、さらに房総半島の竹岡陣屋へ異国船来航の知らせを送った。

サラセン号は午後三時ごろ、浦賀沖へ停泊した。サラセン号の来航目的は、食糧や水を供給してもらうこととであり、サラセン号の乗組員たちは飢餓状態であった。

幕府の異国船対策が「薪水給与令」であることは太平洋洋上で捕鯨活動をしている欧米の船には知られており、究極の事態になったら江戸へ行けば、何等かの方法で解決できるところがわかっていたと思われる。

というのも、このサラセン号が江戸湾に入ってから、奉行所の番船が近づくサラセン号の乗組員が「エド・エド」と発しており、その必死な状況を見た役人たちは怯んでいたことがわかっている。もちろん、正式な記録にはそのようなことは記されていないが、平戸藩主の松浦静山が記した『甲子夜話』には「船は浦賀を過ぎて富津の方へ一里ばかり乗り入れたので、浦賀奉行所の与力・同心が乗り付け、異人を諭して、浦賀へ引き戻したと言っている。しかし、実は江戸へ向かっている異国船に追いついたが、浦賀の役人は乗り込むことが出来ず、遅々としている状況を見た水主が異国船に飛び移り、浦賀の方向を指して「エド」と言い、船の舵を切らせて、浦賀沖へ停泊させることができた」と記されている。

さらに、船乗りの機転で難を逃れた浦賀奉行所はこの事実を隠そうとしたが、船乗りの口には戸を立てることができず知れ渡ってしまったことまで記されている。

『甲子夜話』は誰から上記のようなニュースを入手したのか。それはこの事件に通詞として幕府が派遣した天文方の馬場佐十郎に松浦公の家臣を付けさせたので、この者が江戸へ帰ってから見聞きした一部始終を話したことを記したものであった。

五月四日に馬場と足立左内が浦賀へ到着し、サラセン号の乗組員の中にオランダ語のできる者がおり、この者を通じてサラセン号とのコミュニケーションがとれた。

五月五日、異国船が旗をたくさん建て、きれいになっていたので、その訳を聞くと、日曜日という祝日

とのこと。船に磁石と時計があり、時計は高さ九センチほどの砂時計であり、これで時刻を計っている。舳先には人形があり、人形はヨーロッパの勇者サラセン像であり、それでこの船がサラセン号という船名であった。

サラセン号は捕鯨船であるので、船内には大きな鋸が十本ほどあり、石のかまどが二か所あり、ここで捕ったクジラから直ちに油を取る作業が行われる。

乗組員はラシャの長そでの者や木綿や麻のシャツ姿であり、髪の毛はざんざりでちぢれ毛で茶色、船長はもみあげから鼻の下までひげがあり、武者絵に描かれた朝比奈義秀のようであり、眼は赤く、背丈は高いと日本人との比較も行っている。

また、長い航海をする船の中には大工道具もあり、のこぎりやかんなが日本のもので使用方法が違ふこと。さらに船内にインコがおり、美しい鳥であることや船内の明かりがランプで明るいことなど、異国船探検が楽しく、驚きの連続であったことがよくわかる。

サラセン号は水や食料をもらい、五月八日浦賀港を出て行った。



笑話 一題

少し前のお話ですが、秋ごろに分館の近くにハトの巣があったのをご存じですか？事務所の窓から見える場所に巣作りし、ヒナがヒヨコヒヨコ顔を出し、とてもかわいらしかったです。

そういえば、ここ浦賀に引越してウン十年、様々な生き物に遭遇しました。タヌキ、リス、ヘビ、コウモリ、ムカデ、カブトムシ、クワガタ、トカゲ、ヤモリなど…変わったところでは、ご近所にウグイスやスズメの巣、庭にヘビの抜け殻、そして、なんとミツバチのお引越しにも遭遇したことがあります。（ウァーンという音とともに空一面が真っ暗になり、あっ、と思った時には自宅の梅の木に集まってきました！）海や歴史などの魅力はもちろんですが、都心に近いのに自然の魅力もたくさんある浦賀なのでした。



浦賀コミュニティセンター分館

【特別企画展示会】のお知らせ

「浦賀の近代遺産」

—ドックと砲台—

2月15日（土）～23日（日）

10時～16時（入場無料）

浦賀ドックや砲台などの資料・写真・パネルの展示を行います。

また、基調講演「横須賀のレンガと浦賀ドック」や浦賀ドックミニツアーなどを企画しております。

詳細は、広報よこすか、浦賀 TODAY をご覧ください。